

I-B 266

RC中空断面高橋脚の耐震性能に関する模型載荷試験について

日本道路公団 正会員 花田 克彦
 同 上 正会員 松田 哲夫
 同 上 正会員 湯川 保之
 同 上 正会員 築山 有二
 鹿島建設（株） 正会員 須田 久美子

1. はじめに

阪神・淡路大震災を契機として、RC橋脚の耐震性に対する関心が高まり、「兵庫県南部地震により被災した道路橋の復旧に係る仕様」（日本道路協会、以下「復旧仕様」という）により中間帯鉄筋の配筋が義務づけられるようになったが、中空断面への適用については具体的な配筋方法が示されていない。そこで、RC中空断面橋脚を対象にその耐震性能を模型実験等で検証する必要性が生じた。

本文は、全国レベルで今後建設される中空断面橋脚を対象に中間帯鉄筋の具体的な配筋方法等を検討するために行った模型実験の概要と実験結果の中間報告を行うものである。

2. 実験計画の概要

2-1 実験の目的

模型実験の目的は次のとおりである。

- ・震災後に示された「復旧仕様」を基に試設計したRC中空断面高橋脚の耐震性能を実験的に把握する。
- ・中間帯鉄筋の具体的な配筋方法に関する知見を得る。
- ・ねじり力が橋脚の耐震性能に及ぼす影響を確認する。

2-2 試験体と実験配筋

実験は、高さが40m以上のRC中空断面高橋脚を対象に約1/10の縮小模型試験体(図-1)を製作し、地震荷重を想定した静的交番繰返し加力試験により行った。

試験体は合計15体(表-1)で、No.1試験体を標準とし、それぞれ、横拘束鉄筋(帯鉄筋および中間帯鉄筋)の体積比、中間帯鉄筋の加工形状(直角、半円形フックで拘束するタイプ、柱筋幅止めタイプ、帯筋幅止めタイプ等)、中間帯鉄筋の鉄筋径、中間帯鉄筋の補強範囲、基部の断面形状、せん断スパン比およびねじり加力の有無に着目している。

標準試験体の横拘束鉄筋量は「復旧仕様」による地震時保有水平耐力の照査結果を基に設定した。

柱部に使用したコンクリートの圧縮強度は実験時で約400kgf/cm²であった。

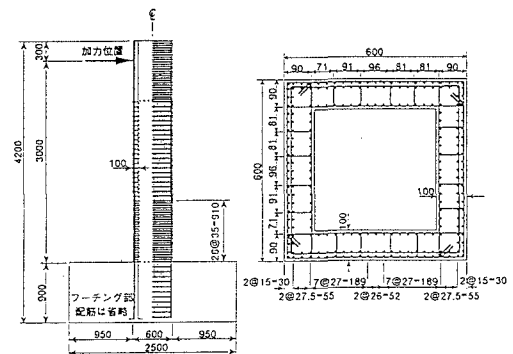


図-1 標準試験体(No.1)の形状寸法と配筋

図-1 実験配列												
試験体 No.	高鉄筋			横拘束鉄筋					基部の 平均 体積比 (%)	基部の 断面 形状	せん断 スパン 比	加力条件 ねじり
	間隔 a (mm)	使用 鉄筋	帯鉄筋量	間隔 s (mm)	断面内 間隔d (mm)	使用 鉄筋	加工 形状	補強の 範囲				
1	35		0.0036ba	35	96				1.47			-
2	30		0.0042ba	30	96				1.72			-
3	20		0.0063ba	20					2.58			-
4				35	187		②案		1.33			-
5				35	54				1.69			-
6				70	187		①案	全高	0.66		中空	-
7				96			②案		1.47			-
8				96			③案		1.54			-
9			0.0036ba	96	54	D3			1.46			-
10				35	96				1.06	10中空		-
11					187				0.81	10中空		-
12						D4	②案		1.47			-
13								基部10	1.47		中空	-
14								全高	1.47			-
15	65		0.0019ba	65				全高	0.79			有り

b: 柱幅 a: 帯鉄筋間隔
平均体積比 = (横拘束鉄筋の体積) / (横拘束鉄筋で囲まれたコンクリートの体積)

b: 柱幅 a: 帯鉄筋間隔
平均体積比 = (横拘束鉄筋の体積) / (横拘束鉄筋で囲まれたコンクリートの体積)

3. 実験結果

ここでは、現在実験が終了しているNo.1～No.13およびNo.15の実験結果をもとに中間報告を行う。

3-1 標準試験体(No.1)の耐震性能

標準試験体の水平荷重-水平変位関係と破壊の進行状況を図-2に示す。標準試験体は最終状態まで軸力を保持して実験を終了しており、十分な耐震性能を有していると考えられる。部材降伏荷重の計算値まで荷重が低下した時点を終局と定義すると、じん性率($\delta u / \delta y$)は10.3であった。

3-2 じん性率と横拘束鉄筋の体積比の関係

横拘束鉄筋の体積比に着目した試験体の実験結果をじん性率と横拘束鉄筋の体積比の関係で示す（図-3、数字は試験体No.）。体積比を変化させる方法には横拘束鉄筋の部材軸方向の間隔を変化させる方法（図中●）と中間帯鉄筋の断面内間隔を変化させる方法（図中○）があるが、中間帯鉄筋の断面内間隔を変える方がじん性率に及ぼす影響が大きかった。

また、図中には体積比に着目した試験体のみでなく、中間帯鉄筋だけを細径にし標準試験体と同じ平均体積比になるように配筋した試験体（No.9）及び中間帯鉄筋を基部の60cm（断面高さに相当）の範囲にのみ配筋した試験体（No.13）の実験結果も併記した。それによると、体積比が同じであれば中間帯鉄筋が細径でも標準試験体と同等以上のじん性率が得られること、中間帯鉄筋の配置が基部のみでも標準試験体よりじん性率が小さくなることはないことがわかった。

3-3 じん性率と耐力比の関係

基部を中実にした試験体及びせん断スパン比を小さくした試験体の実験結果をじん性率と耐力比（曲げ耐力に対するせん断耐力の比）の関係で示す（図-4）。横拘束鉄筋の配筋が同じNo.1（中空）とNo.10（基部中実）、No.4（中空）とNo.11（基部中実）を比較すると、基部を中実にした方がじん性率が大きくなっている。しかし、通常じん性率評価式のパラメータとして用いられる耐力比との関係でみると帯鉄筋比を変化させたシリーズの勾配（図中破線）に比べ、基部断面形状がじん性率に及ぼす影響（図中矢印）は小さい。繰返し加力を考慮し、 (V_c+V_s) に代わって V_s だけで耐力比を評価しても、矢印の勾配は破線と同等か若干低くなっている。この理由

は、交番加力によって実質の V_c 値が低下していること他に、中空部分では中間帯鉄筋の外側のフックがすべて半円形フックであったのに対し、中実部分では通しで配筋されるため半円形フックと直角フックが千鳥に配置されることにより、中空部分に比べて中間帯鉄筋の効きが良くないことなどの影響が考えられる。

4. 実験から得られた知見

今回の模型載荷試験の結果から得られた知見をまとめると次のとおりである。

- ・ 中間帯鉄筋を配筋したRC中空断面橋脚部材は十分な耐震性能を有していた。
- ・ 中間帯鉄筋だけを細径にした場合、体積比を同じにすれば、標準試験体と同等以上のじん性が得られた。
- ・ 中間帯鉄筋を基部1D区間のみに配置した場合でも標準試験体と同様のじん性であった。
- ・ 基部の断面形状については、中空に比べ中実の方がじん性率が大きくなったが、その上昇度合は中実部分の中間帯鉄筋によって増加した V_s 分で見込まれる量と同等か若干低かった。

5. おわりに

阪神・淡路大震災以後、RC橋脚は中間帯鉄筋等によるじん性の確保が義務づけられていたが、中空断面においては、その具体的配筋方法等が示されていなかった。しかし、今回の実験によりその基本的知見が得られたと考えられる。また、今後はさらに検討・解析をすすめる中空断面橋脚の耐震設計に反映させるつもりである。最後に本文が今後の耐震設計の一助となれば幸いである。

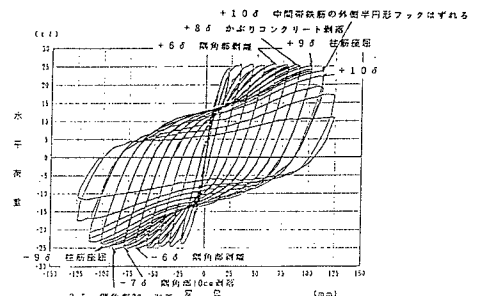


図-2 水平荷重と水平変位の関係

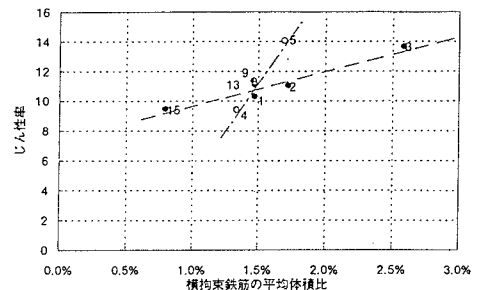


図-3 じん性率と横拘束鉄筋の平均体積比の関係

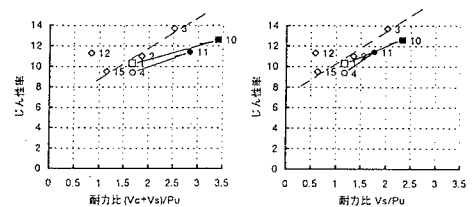


図-4 じん性率と耐力比の関係